

國學院大學學術情報リポジトリ

「元祖女みこし」にみる参加者の実態と神田祭：
「伝統型」都市祝祭の中の「合衆型」

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-10-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 秋野, 淳一 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001018

「元祖女みこし」にみる参加者の実態と神田祭

——「伝統型」都市祝祭の中の「合衆型」——

秋野 淳 一

はじめに

平成二七（二〇一五）年、東京の神田祭は神田神社（神田明神）が千代田区外神田の現在地に遷座してから四〇〇年という記念すべき節目を迎え、奉祝大祭として盛大に行われた。特に、五月一〇日（日）に行われた氏子町会の神輿宮入では、多くの観客が神田神社境内に押し寄せ、神田祭とコラボレーションを行ったアニメ「ラブライブ！」の授与品やグッズを受けるべく並ぶ若者の列と交差し、一〇日午後の宮入では、予定時刻より大幅に遅れるほどの賑わいとなった。この宮入の様子は、インターネットやテレビを通じてお茶の間にも届けられた。神田神社とNTTコミュニケーションズが制作したインターネットTV「神田祭ch」では、例年の通りであるが、稲川淳二がスペシャルゲストとして出演し、宮入の様を生中継した。稲川にはお気に入り神輿がある。それは、神田神社の氏子町会の一つである須田町中部町会の女神輿である。この神輿は、キャバレーのママが担ぐ女神輿はあっても、一般の女性が



写真1 須田町中部町会の「元祖女みこし」
(秋野淳一撮影、平成27年)

優子が出演し、内神田鎌倉町会の神輿宮入や多町二丁目町会の町内渡御の様子などが中継された。当初、番組では多町二丁目町会の神輿と須田町中部町会の「元祖女みこし」とのコラボレーションも企画されたが時間やタイミングなどの課題があり、実現には至らなかった。多町二丁目町会は須田町中部町会の隣の町会である。

このように、脚光を浴びる須田町中部町会の「元祖女みこし」であるが、二つの特徴がある。一つは、町会の神輿を男神輿と対になることなく単独で、しかも全区間を女神輿として担ぎ、神田神社への宮入を果す他に類のない女神

担ぐ女神輿としては先駆けであるとの意識から「元祖女みこし」を名乗っている。稲川は、二年前（平成二五年）の神田祭の際、神田神社境内で宮入の順番待ちで待機している「元祖女みこし」のすぐ近くまで出向き、担ぎ手の女性たちと対話した。平成二七年も同様の光景が見られた。また、TOKYO MXテレビの「日本の祭り」（制作：テレコムスタッフ）が「ダイドードリンコスペシャル 神田祭」遷座400年 受け継いできた日本のこころ」と題した番組を平成二七年六月一四日に放映した。番組では、須田町中部町会の「元祖女みこし」について取り上げ、担ぎ手の募集を担当する女性たちの様子を中心に描写していた。このほか、テレビ東京のBS JAPANで開局一五周年特別企画「生中継！神田明神遷座400年記念「神田祭」と題して、五月一〇日の一五時～一七時半の時間帯で宮入の様子を中心に生中継を行った。俳優・村上弘明と笛木

興であることである。もう一つは、参加者(担ぎ手)を一般募集することである。平成二五年からはインターネットでの応募も可能になった。『日本経済新聞』のコラム「かれんとスコープ」では「祭りの助っ人、全国募集「地域と一体」若者魅了」と題した記事を平成二七年八月二三日付で掲載した。このコラムでは、祭りの担い手不足に悩む地域の伝統的な祭りに注目している。その中で、「域外参加者を受け入れる主な伝統的祭り」の一つとして、神田祭の「須田町中部町会が元祖女みこしの参加者を一般公募。約180人の女性が参加」と紹介している。しかしながら、ここでは「元祖女みこし」にどのような人たちが参加しているかは記されていない。本稿ではこの「元祖女みこし」の参加者の実態に迫ることを目的とする。

ただし、本稿はメディアが注目するから「元祖女みこし」を分析対象とするわけではない。それなりの理由があったことである。一つは伝統的な宗教と新しい祭りの場の共存を考える上で参考になると考えるからである。人口減少社会において地域社会の居住人口が減少し、地域社会の外側から人を招く場合にどのような条件が必要であるかを判断するための一つのヒントになると考える。すなわち、國學院大學二一世紀研究教育計画委員会研究事業「地域・渋谷から発信する共存社会の構築」における「共存学」に関わる領域である。二つは、「元祖女みこし」の参加者の持つ構造が、渋谷の道玄坂町会における参加者の構造と類似する点を持つことである。これは同研究事業の「渋谷学」に関わる領域である。そして、三つは、「元祖女みこし」の参加者の実態が現代の都市祝祭の構造を考える上で重要なヒントになる事例ではないかと考えるからである。

そこで、本稿では、神田祭の「元祖女みこし」の参加者を対象として、平成二五年と平成二七年の実態調査からその特徴を明らかにするとともに、他の都市祝祭との比較検討を行い、共通点と相違点を明らかにする。そして、「元祖女みこし」の実態から現代日本人の伝統的な宗教に対する新しい意味や役割を判断するための一助としたい。

一 「元祖女みこし」への接近

(一) 戦後の都市祭りと女性の参加

戦後の都市祭りにおける大きな変化として、女性の参加を指摘している先行研究が複数ある。例えば、民俗学の阿南透は「歴史を再現する」祭礼」の中で、明治二八（一八九五）年に創設された時代祭の戦後の大きな変化として、女性の参加と、歴史上著名な人物が数多く個人名を持って登場するようになったことの二点を挙げている。¹⁾また、昭和四三（一九六八）年に神田祭の調査を行った宗教学の藪田稔は、「特に印象的なのは、年齢層を問わず女性の参加が目立つことである」と指摘している。藪田は翌年、この神田祭の調査結果の詳細を「祭と都市社会―天下祭」（神田祭・山王祭）調査報告（一）²⁾としてまとめている。藪田の調査から二四年が経過した平成四（一九九二）年に神田祭の調査を行った社会学の松平誠は、藪田の調査結果と比較分析を行った。藪田の調査以後、神田地域では「脱地域化」が進み、その結果、町内の居住集団に大きな変化が生じ、平成四年では一般動員（祭りの担い手）に三つの特徴があることを明らかにしている。³⁾具体的には、第一に「動員される人々のなかに、半数ないし1/3の女性が登場してきたこと」、第二に「かなりの部分を様々なネットワークで集めた町内会員外の人々で補っていること」、第三に「1970年代以来の新顔として、御輿同好会のメンバーが加わったこと」である。ここでも、松平誠は、女性の参加を大きな変化の一つの特徴として捉えている。松平は第一の特徴について「なかには、女性だけに御輿担ぎを限定して特色を出している町内さえ生まれている」と付け加えている。これが須田町中部町会の「元祖女みこし」に当る。

須田町中部町会は、東京都千代田区神田須田町一丁目の二〜一四までの偶数番地を町会の区域としている。靖国通りと外堀通り、中央通りに挟まれた地域で、東京メトロ淡路町駅、都営新宿線の小川町駅に近い。町会区域内には、

庄之助最中や天ぶらの天兵、小山弓具店などの老舗が店舗を構えている。その一方で、靖国通り沿いには高層ビルが建ち、ワンルームマンションや企業がオフィスを構えている。町内には「神田青果市場発祥之地」の記念碑が立てられていて、神田青物市場発祥の地として、その伝統を意識する町会である。

松平誠は、この須田町中部町会の女神輿について、平成四年の神田祭全体の調査を行う前の昭和六〇年・六二年・平成二年の調査をベースに、地域社会との関係から詳細な調査を行っている⁽⁵⁾。このうち、平成二年の参加者は、町内七人・町内関連法人六一人（E生命保険七人、D生命保険三人、H会計事務所一人、T都市銀行六人、S都市銀行二人、Y信託銀行一人、S金融機関三人、K金庫四人、A金融機関四人、S証券会社三人、その他企業九人）、町内地縁・血縁者および友人五八人、立教大学社会学部松平研究室二二人の総数は一四八人である（図1参照）。金融機関の割合が全体の三五%（五一人）を占めている。平成二年の松平の調査から二三年が経過した平成二五年の「元祖女みこし」の参加者数は、筆者の調査によると、募集を締め切った平成二五年の四月二五日時点で一六九人である。内訳を見ると、一般二二人（うちブログ応募一六人、ブログ以外六人）、

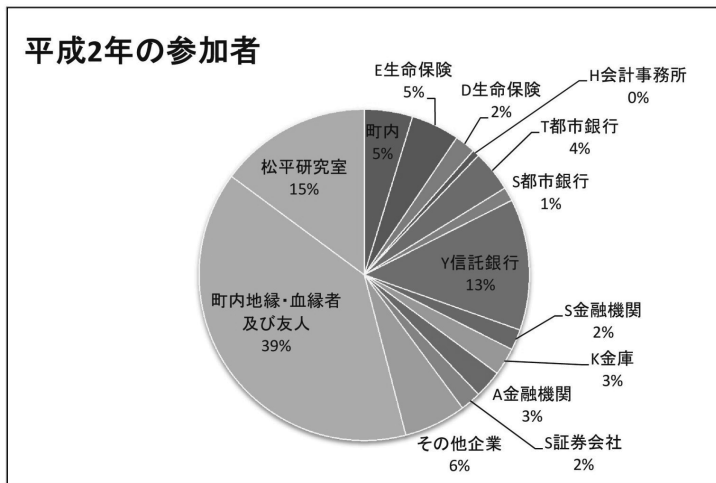


図1 平成2年の「元祖女みこし」参加者・内訳

ワテラスの学生四人、女みこし担ぎ手募集係Oさんの友人・知人二人、女みこし担ぎ手募集係Kさんの友人・知人一人、(うちマラソン友達五人、行政書士会五人)、S信用金庫四人、S歯科七人、靴屋さんとその友人六人、町会Oさんの知人一人、(うち茨城県から四人)、町会Kさんの親類とその友人五人、町会Yさんの親類・知人六人、町会青年部Iさんの知人六人、町会青年部Aさんの知人一人、町会YMさんの友人・知人一人、(うちブログ応募三人、O治療院四人)、町会Tさんの親類とその友人・知人六人、KKさんとその友人二人、SKさんとその友人五人、町会Hさんの親類と知人三人、SGさんの知人五人、町会Nさんの知人四人、Eさん一人、分類不明二人である(図2参照)。うちブログ応募は、一九人で全体の二・二%である。

平成二五年は、松平が調査した平成二年の内訳と比較すると、町内関連法人、特に金融機関の参加率が三五%(五一人)から二%(四人)に減少し、「女みこし担ぎ手募集係」の友人・知人の二〇・一%(三四人)と町会に縁を持たない「一般」の一三%

(二二人)を合わせると全体の三三・一%(五六人)と増加している。町内の金融機関の減少に伴い、祭りの担い手を「社縁」(会社縁)から「選択縁」へ移行させ参加者の維持・拡大に成功したことがわかる。

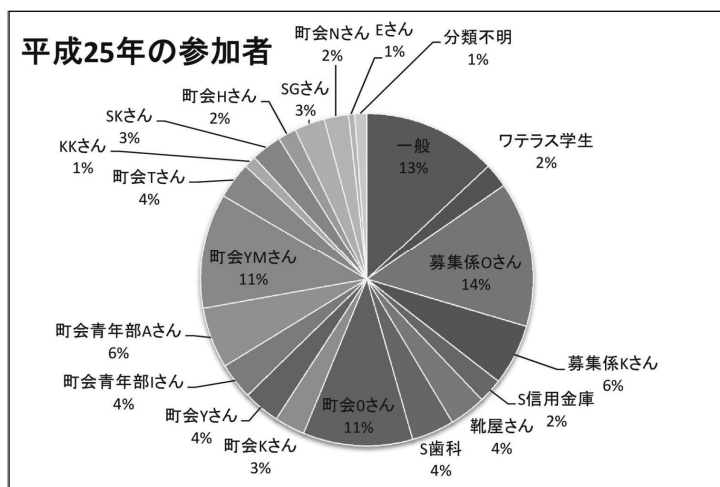


図2 平成25年の「元祖女みこし」参加者・内訳

(二) 「伝統型」都市祝祭と「合衆型」都市祝祭

松平誠は、現代の都市祝祭を、日本の都市の主要な祝祭類型として、「近世の伝統の上に開花しながら、産業化のなかでその基本的な性格を体現してきた都市祝祭」とする「伝統型」(伝統的都市祝祭)と、「伝統とは無縁で、不特定多数の個人が自分たちの意思で選択した、さまざまな縁につながって一時的に結びつき、個人が「合」して「衆」をなし、あるいは「党」「連」「講」などを形成してつくりだす祝祭」を「合衆型」に分類している。⁷⁾「伝統型」の代表的なものとして、「神田明神の付祭や深川八幡の付祭のように、地縁のカミを祭る都市地域共同の特定の閉鎖的な集団の運営する祭礼を祖形とするもの」を挙げ、「祝祭そのものの性格が、基本的に伝統の基盤のうえにたち、核になる組織が明確なものは、すべてのこの伝統的都市祝祭に入れる」⁸⁾としている。一方、「合衆型」の代表例として東京高円寺の阿波おどりを挙げている。この分類に従えば、神田祭は「伝統型」に分類できると考えられる。

しかしながら、既に國學院大學二一世紀研究教育計画委員会研究事業「地域・渋谷から発信する共存社会の構築」の共存学における成果論集である『共存学3』に所収された拙稿で簡単に紹介したように、須田町中部町会の「元祖女みこし」は、松平が「伝統型」とする都市の神社祭礼の中に、不特定多数の個人が自分たちの意思で選択した、さまざまな縁につながって一時的に結びつく「合衆型」の要素を併せ持っていることが窺えるのである。そして、それは、神田祭の「元祖女みこし」のみならず、渋谷・金王八幡宮の氏子町会である道玄坂町会の祭礼においても、その担い手の実態を分析すると、「伝統型」の中に「合衆型」の要素を併せ持っていることが明らかに⁹⁾なった。ただし、神田祭の「元祖女みこし」については、詳細な参加者のデータを提示した上での実証的な検討を拙稿では行っていない。

そこで、本稿では、神田祭の「元祖女みこし」の参加者の実態について、平成二五年と平成二七年の最新データから検討してみたい。

二 「元祖女みこし」の参加者（担ぎ手）の実態

まず、平成二五（二〇一三）年に参加者（担ぎ手）が拡大した「女みこし担ぎ手募集係」の友人・知人と、須田町中部町会に全く縁を持たない「一般」の参加者に焦点を当て、「元祖女みこし」の参加者の内実に迫りたい。

（一）平成二五年の参加者の実態

分析の対象は、平成二五年六月二〇日（木）一九時から行われた「女みこし担ぎ手募集係」による参加者の打ち上げの席上で参加者に、①「元祖女みこし」を担ぐようになった切っ掛け（どのようなつながりによって参加したのか）、②神田祭で「元祖女みこし」を担いだ感想を記入してもらった。そこで得られた一五人（うち一人は後日メールで回答）のデータを基にしたものである。まずは、記入内容を列挙する。

《一五人の参加者の内実》

【Oさんの関係（1）】HUさん…初参加。神輿担ぎの経験なし。昭和三四（一九五九）年生。Oさんの音楽ファン（CKB）仲間。「七五三のお参りできた神田神社に、半世紀を経て又、参拜できるとは…！お神輿を担がせて頂けたのは町内会の皆様の広いお心のおかげ様です。ありがとうございます。人生の節目に、初めての経験、この意味、メッセージをかみしめてまいります。神社がとても安らぎます！」

【Oさんの関係（2）】MHさん…初参加。昭和四三年生。Oさんの音楽ファン（CKB）仲間。「軽い気持ちで参加してみてもこんな歴史のあるお祭りにかかわられて本当にこういいでした。気分もスッキリしたような気がします。又

やりたいです!!」

【Oさんの関係(3)】YMさん…初参加。女みこしは初参加だが、神輿担ぎの経験あり。昭和三四年生。「OさんつながりのH Uさんのイトコです。地元目黒碑文谷八幡のお祭りで三〜四年間担がせていただきました。今回一〇年ぶりにお神輿をかつがせていただき、とても感謝しています。女神輿は初めてで、とてもかつぎやすく(背たけの関係もあると思いますが)、気持ちの一体感も格別だったと思います。」

【Oさんの関係(4)】MNさん…初参加。昭和四〇年生。Oさんの音楽友だち。「初めての参加で、何も分からなかったけれど楽しかったです。おみこしはやっぱり重たかった。どんどん疲れていったけれど、神様をお連れして歩いているんだと思うと、気持ちがあがりました。縁起がいい感じで楽しかったです。」

【Oさんの関係(5)】MFさん…神輿担ぎ経験あり。Oさんの中学の同級生。「練馬区氷川台の氷川神社にて日神輿会として参加しています。今年(平成二五年)は九月七日・八日です。宜しくお願いします。」

【Oさんの関係(6)】ZSさん…神輿担ぎ経験あり。昭和四九年生。「MFさんの後輩です。私は近年(四〜五年くらい)から日神輿会に参加し、楽しませて頂いています。宜しくお願い致します。」

【Oさんの関係(7)】AKさん…初参加。昭和五四年生。「Oさんのお母様と一緒に会社で働いています。元々母の実家が神田にあり、神田祭を毎回見に来ておりました。今回は、Oさんのお母様にお声掛けを頂き、初めてかつがせて頂きました。」

【Kさんの関係(1)】TSさん…初参加。昭和四五年生。Kさんの行政書士つながり。「神田界限に一〇年おりますが初めて女みこしを知り参加いたしました。多数の参加であまり担がずに済んで(問題発言か?)よかったです。でも大変たのしかったですので、次回も参加いたします。」

【Kさんの関係(2)】TKさん…初参加。「Kさんのランニング友達です。今回、初めてみこしを担ぎました。あの衣装も着てみたかったし、みこしも前から担いでみたいと思っていました。念願がかなってうれしかったです。当日も本当に楽しくてしかたなかったです。ぜひ、また二年後も!!」

【Kさんの関係(3)】CYさん…初参加。昭和三十九年生。「Kさんを通じて、TKさん経由で、今年、生まれてはじめてのミコシをかつぎました!ありがとうございます!町内会の方々の準備、役員?の方の声掛け等、かつぎ手の集め方が大変だったとの事。二年後は、又、参加出来る様体力維持にガンバリます!!」

【Kさんの関係(4)】KNさん…初参加。「Kさんの紹介で参加させていただきました。歴史ある祭りに縁あって参加させていただき感謝しております。担いだことで縁かつぎになるかも、と勝手に思いこみ、また参加できればと思います。」

【一般(1)】HSさん…初参加(ただし、神輿担ぎの経験はあり)。「ブログを見て、参加させていただきました。お神輿を担ぐのが大好きです。血が騒ぎます。全員がイキが合ったときの一体感、感動は忘れられません。日本三大祭りの一つである神田祭に参加することができ、幸せに思います。」

HSさんは、神輿同好会にも入ったことがあったが、神輿同好会に知り合いがおらず、仲間に入れず上手くなじめなかった。その点、「元祖女みこし」は一人でも参加しやすい良さがあったという。また、半纏やダボシャツなどの衣裳も手ごろな値段で借りることができるので参加しやすかったという。女性だけで担げるのも安心して担げる利点であると話す。HSさんは、インターネットで調べていて、「須田町ガールズ」(「元祖女みこし」の担ぎ手募集)のブログに出会い、平成二五年に応募した。

【一般(2)】YTさん…初参加(ただし、神輿担ぎの経験はあり)。「HSさんの友達でお神輿を担ぐのは三回目

した。女神輿は初めてでしたが、とても担ぎやすかったです。一日を通して担いだのも初めてだったので、疲労感がありつつも貴重な体験ができたという気持ちが強く残って、また参加したいと思っています。」

【一般(3)】KNさん・初参加。「HSさんの友人で誘ってもらいました。下町(深川)出身ですが、昔はあまり興味はなく最近歳を経て下町文化が好きになってきました。もっと早く気が付いていれば:(笑)」

【一般(4)】ETさん・初参加。昭和四七年生。「今年二月～三月にかけて、九段下の千代田区生涯学習館にて、地域情報発信のためのフリーペーパーを製作する講座があり参加しました。各自興味のあるテーマで記事を作るということでしたので、以前から興味がありましたお祭りのテーマのグループに参加することになりました。グループは男性二名、女性二名でしたが、ちょうどその日に講師としていらした方のフリーペーパーに神田須田町の女御輿担ぎ手募集の記事があり、それを見た参加者(男性)から女性の私たちにこの祭に参加して、その経緯などを取材してはどうか、という話がありました。正直、その時は全然気乗りしていませんでした。須田町会長に連絡を入れてインタビューをしたり、女御輿事務局に伺ったりするうちに自分の中で気持ちが少しずつ高まっていったかんじです。最初はどうしたらよいか全然分からずに後ろについて歩いていましたが地元の方に腕を捕まれて中に入れられて、必死に見よう見真似で担ぐうちに、これはどんどん自分から担いで楽しまないと損だなと思いました。普段出さない大きな声を出したり、宮入の時の気持ちの高ぶりなど、初めて経験することばかりでも楽しかったです。千代田区在住ですが、麹町地区なので神田祭に参加することは難しいと思っていたのでこのような機会に参加させていただいたことは本当に感謝しています。益々地元のが好きになりもっと知りたいと思いました。また再来年も参加させていただきたいと思っています。」

(二) 平成二五年の参加者の特徴

以上の一五人からみえる参加者の特徴についてまとめると、以下のように整理できる。

①「音楽仲間」、「マラソン仲間」、「同級生」、「仕事」、「生涯学習」といったつながりを媒介に「元祖女みこし」に参加している。

②「元祖女みこし」への初参加者は、一五人中一三人（女みこし担ぎ手募集係Oさんの関係：七人中五人、Kさんの関係：四人中四人、一般：四人中四人）と、初参加の人が多数（約八七％）を占めている。

③初参加のうち「次回（平成二七年）も参加したい」と明確に答えている人は、初参加の一三人中七人（Oさんの関係：五人中一人、Kさんの関係：四人中四人、一般：四人中二人）と、半数以上が再度の参加を希望している。

④初参加のうち、女神輿を担いだ感想として、「楽しかった」などプラスの評価を明確に言語化している人が一三人中一二人と、ほぼ全員に近く、「元祖女みこし」の体験を肯定的に捉えている。

⑤プラスの評価のうち、「一体感」を言語化している人が一三人中二人、「感動」を言語化している人が一三人中一人、「気持ち上がる」、「高ぶる」を言語化している人が一三人中二人である。

以上からわかるのは、「元祖女みこし」は、初めての参加者が多数を占め、神輿担ぎ（連合渡御や神田神社への宮入）を通じて肯定的なイメージが形成されていることがわかる。

(三) 平成二七年の参加者（担ぎ手）の実態―平成二五年との比較から―

次に、平成二七年の「元祖女みこし」の参加者（担ぎ手）についてみておきたい。平成二七年の「元祖女みこし」の参加者は、「2015年衣裳貸し出し台帳」によると一八四人¹⁰である。平成四年の一四八人、平成二五年の一六九人



写真2 「元祖女みこし」の神田神社への宮入
(秋野淳一撮影、平成27年)

と比較すると、参加者は増加傾向にある。平成二五年の参加者のうち、先述した「女みこし担ぎ手募集係」の関係と「一般」の参加者のうち、分析対象とした一五人中一三人（八六・七％）が平成二七年の「元祖女みこし」にも参加した。平成二五年に続き平成二七年も「元祖女みこし」に参加した人は、一八四人中六〇人（三二・六％）となり、約三割を占める^①。こうしたリピーターがいる一方で、約六〜七割が平成二五年には参加せず、平成二七年に新たに参加した人たちであるということがわかる。流動性の高い構造を持っているといえる。参加者が増加したグループと減少したグループに分類して主な事例について見ていくと次のようになる。

なお、ここでいう「一般」とは、平成二五年に須田町中部町会に全くつながりを持たずブログやポスターで告知された担ぎ手募集に応募してきた人たちである。

《増加》

- ・「女みこし担ぎ手募集係」の関係…四七人（二五・五％）；平成二五年は三四人（二〇・一％）「一三人増加」
- ・町会青年部I氏（飲食店経営）の関係…一五人；平成二五年は六人「九人増加」
- ・二人以上のグループではなく一人の参加者…一一人；平成二五年は二人「九人増加」

- ・【一般】前回ブログから応募したFさんの関係…八人…平成二五年は三人「五人増加」
- ・町会Y Sさんの関係…一人…平成二五年は七人「四人増加」
- ・【一般】前回ブログから応募したSさんの関係…一人…平成二五年は七人「三人増加」
- ・【一般】前回ブログから応募したI Cさんの関係…四人…平成二五年は二人「二人増加」
- ・町会Y氏の関係…七人…平成二五年は六人「一人増加」

《減少》

- ・町会O氏の関係…八人…平成二五年は一八人「二〇人減少」
- ・O靴店の関係…〇人…平成二五年は六人「六人減少」
- ・町会S G氏の関係…〇人…平成二五年は六人「六人減少」
- ・ワテラス学生…〇人…平成二五年は四人「四人減少」
- ・町会N K氏の関係…〇人…平成二五年は四人「四人減少」
- ・O治療院…二人…平成二五年は四人「二人減少」
- ・町会H氏の関係…〇人…平成二五年は二人「二人減少」
- ・町会青年部A氏の関係…九人…平成二五年は一〇人「二人減少」
- ・S信用金庫…三人…平成二五年は四人「一人減少」

主な増加したグループと減少したグループを挙げてみると、増加したのは、「女みこし担ぎ手募集係」の関係や平

成二五年にブログ経由で応募した「一般」の参加者、二人以上のグループではなく一人の参加者、町会青年部I氏（飲食店経営）の関係である。平成二五年にブログ経由で初めて参加した「一般」の参加者が、友人を連れて参加し、その関係が増加していることがわかる。また、一人だけで応募した一人の参加者の拡大も特徴的である。反対に、減少したのは、複数の町会関係者のつながりである。また、誰も参加しなくなったグループが複数存在し、流動性の高さが窺える。

以上のように、「元祖女みこし」は、松平誠が指摘する「伝統型」の都市祝祭の中に、不特定多数の個人が自分たちの意思で選択した、さまざまな縁につながって一時的に結びつく「合衆型」の要素を併せ持っていることが確認できた。むしろ、渋谷・金王八幡宮の祭礼における道玄坂町会の神輿と同様に、「伝統型」の中に「合衆型」の要素を併せ持つことによって参加者は増加しつつあるといえるのではなからうか。

（四）他町会の神田祭との比較

さらに、他町会の神田祭についても確認しておきたい。松平誠が平成四年の調査から「動員される人々のなかに、半数ないし1/3の女性」⁽²⁾の参加者があることを指摘しているが、平成二五年および平成二七年の神田祭においては、半数ないし三分の一には必ずしも至っていないものの、女性の参加は増加傾向にあることが窺える。

平成二五年の神田祭について、神田神社への宮入実施町会を中心に五四町会と二連合（錦連合・小川町連合）を対象とした筆者の調査によると、「女性の参加者が多い」とする町会が九町会確認できた。⁽³⁾

平成二七年では、一部区間を女神輿にする町会が、神保町一丁目町会（日曜一七時頃の町内渡御）、内神田鎌倉町会（日曜・宮入後など）、神田鍛冶三町会（金曜一九時の町内渡御）、淡路町二丁目町会（土曜一八時・ワテラス）、

鍛冶町二丁目町会（金曜一八〜一九時・女性五〇人限定）、神田駅東地区連合（連合の子ども神輿が宮入を終え復路で連合の女神輿になる）などでみられた。こうした女性の参加者のニーズに応え、新たな参加者の開拓にもつなげようと、平成二七年は神田祭に先立ち、四月八日（水）の一九時からアーツ千代田3331を会場として、神田神社のバックアップと外神田連合の協力のもと、女性を対象とした神田祭入門講座が開催された。

なお、平成二五年に生涯学習の縁で「元祖女みこし」に初めて参加したETさんは、平成二七年のこの神田祭入門講座に参加していた。講座が開催された四月八日の時点では、平成二七年は神田祭のお囃子に参加する予定であったが、最終的に五月一〇日の「元祖女みこし」の巡幸に参加した。

しかしながら、「元祖女みこし」のように、町会に全くつながりを持たず、インターネット経由で町会の神田祭の担ぎ手募集に応募できる環境は、他町会ではあまり進んでいない。わずかに岩本町三丁目町会などでみられるに過ぎない⁽⁴⁾。多くが、何らかの町会員とのつながりを媒介として町会の神田祭に担ぎ手として参加している現状がある。また、神田神社への宮入の際、「元祖女みこし」は、女性が町会神輿の華棒を担ぐことができる。担ぎ手全員が女性であるからであるが、内神田鎌倉町会では、宮入の際の町会神輿の華棒を女性が担ぐことを禁止しているという。そのため、神輿同好会のあるメンバーは、平成二五年の須田町中部町会の「元祖女みこし」に参加している。

他方、性別にかかわらず、町会の神輿が宮入する際に、神田神社境内では、外部の担ぎ手に町会の神輿の華棒を担がせないという町会が複数存在する。そうした中で、須田町中部町会の「元祖女みこし」は、女性であれば、初参加であっても、神輿同好会のメンバーを含む町外からの参加者であっても、町会の神輿の華棒を担いで宮入できる条件を持つていることになる。

三 「合衆型」の都市祝祭との比較

ここでは、「合衆型」の都市祝祭と「元祖女みこし」の比較を行い、他の都市祝祭との共通点と相違点を確認しておきたい。

(一) 高円寺の阿波おどり

高円寺の阿波おどりは、阿佐ヶ谷の七夕に対抗すべく、地元・氷川神社の祭礼への奉納、商店街の振興、地域住民の健全なレクリエーションを目的として、昭和三二（一九五七）年から始められた祭りである。徳島の阿波踊りをモチーフに高円寺の阿波おどりとして独自の発展を遂げた。踊り手は、阿波おどりの揃いの衣裳に身を包み、「連」と呼ばれるグループごとに参加する。

松平誠は、既に述べたように、「合衆型」の代表例として東京・高円寺の阿波おどりを挙げている。この高円寺の阿波おどりと伝統的な神社祭礼との違いについて、松平は、過去の氏子祭礼と異なるのは、氏素性が全く問題にされないことを指摘している。地縁的・血縁的・家族的制約もなく、多くの場合、個人単位である。個人に対して連からの強制力は一部を除いてはなく、加入脱退や連から連への移動も簡単に起こり、年々の顔ぶれが固定している連はほとんどない。また、女性の参加も多く年齢的・性的な拘束もなく、地域的（空間的）な拘束もないことを指摘している。¹⁵⁾

あくまでも松平は、「伝統型」に対する「合衆型」の都市祝祭の相違点として、以上の特徴を挙げているが、平成二五年（二〇一三）および平成二七年の神田祭の「元祖女みこし」も同様の傾向を持っていることがわかる。つまり、

参加者が個人単位で非常に流動的である点が共通している。

「元祖女みこし」では、町会で半纏や鉢巻などの衣裳の貸出を神輿巡幸に先立って行っている。平成二七年、参加者が衣裳を町会の配布場所に受け取り来た際に、受け取りに来た本人に代わって、参加申し込みをしている友人の氏名がわからず、誰の申し込みなのか不明で混乱する場面がみられた。あるサークルの友人同士で、お互いにあだ名で呼び合っていたため、本名をお互いに知らないまままでこれまで済んできたという。参加するグループの友人同士の氏索性すら問題にされていないことがわかる。

もう一つ、高円寺の阿波おどりで重要な共通点は、高円寺の氷川神社の存在である。松平が指摘するように、高円寺の阿波おどりは、第一回から高円寺の氷川神社の例祭日に合わせて行われてきた。¹⁶平成二六年にみた高円寺の阿波おどりにおいては、高円寺の氷川神社の境内には屋台（出店）が出され、多くの参拝客で賑わっていた。神田神社と、そこに宮人を果たす「合衆型」の要素を持つ「元祖女みこし」と共通して、高円寺の阿波おどりにおいても、伝統的な神社の存在と「合衆型」の都市祝祭の共存がみられるのである。

(II) よさこい祭り

高知のよさこい祭りは、高知市の商工会議所の発案によって、戦後の経済復興と夏枯れの景気対策を目的に昭和二九年に開始された。チームによる踊りを中心とした祭りで、徳島の阿波おどりに負けないような市民祭りを目指して始められた祭りである。奇抜なメイクに派手な衣装をまとい、カチカチと音の出る「鳴子」を手にして若者が踊るよさこい祭りの光景は著名である。その後、よさこい祭りは全国に展開していった。女性の参加も多い。このよさこい祭りも「合衆型」に分類できると考える。

高知のよさこい祭りを分析した地理学の内田忠賢は、平成四年五月二〇日現在、踊り子隊のメンバー二九団体で、メンバーを一般募集して、応募者は毎年参加するチームを変えるものが多いことを指摘している。また、演者と観客が明確に区別され、阿波踊りやりオのカーニバルと共通し道路を舞台としたパレードを基本としている。さらに、テレビ等のメディアも大きく影響している点、「祈願祭」といった神事を行う点などを指摘している。内田は、翌年の平成五年五月では、参加する一四四団体中五二団体が一般募集を開始したことを明らかにしている。⁽¹⁷⁾

全国のよさこい祭りを対象として分析を行った文化人類学の矢鳥妙子は、北海道のYOSAKOIソーラン祭りについて、踊り隊は一般募集が多いことを明らかにしている。⁽¹⁹⁾ また、矢鳥は、よさこい祭りとは神田との関わりについて「高知においては現在でも祭りの最初には祈願祭が行なわれるが、宗教色は極めて弱い。しかし、新たに「よさこい稲荷神社」が誕生した。北海道の「YOSAKOIソーラン祭り」は本来全く宗教色が無いもののはずが、大通公園の中に「よさこいソーラン神社」が祭りの期間中だけ設置される⁽²⁰⁾ ことを指摘している。

高円寺の阿波おどりと同様に、よさこい祭りにおいても、「合衆型」の都市祝祭と神社が密接に関連していることがわかる。しかも、新たに「よさこい稲荷神社」、「よさこいソーラン神社」が作られた点が重要である。既に、宇野正人が、神戸まつりの分析から伝統への指向を持つことを指摘しているが、現代の都市祝祭の賑わいの場に神社が求められている意識が垣間見れるのである。

(三) 遠征

「元祖女みこし」と「合衆型」の都市祝祭の共通点として、「遠征」を挙げておく必要がある。阿南透は、青森のねぶたのロサンゼルスへの遠征の分析において、「遠征」とは「祭りが本来行われる場を離れ、他の場所で演じられる

例⁽²²⁾」と定義している。つまり、神輿や山車などの祭礼の象徴が違う場所で巡幸などを行うことを意味する。

実は、過去に「元祖女みこし」も神田祭を離れて遠征を行ったことがある。既に、拙稿⁽²³⁾でも触れているが、平成二年の京都府亀岡市安町の「安町の夏祭り」、平成一五年の「江戸天下祭」、平成一六年の山口県萩市「萩夏まつり」で、それぞれ神輿の巡幸を行った。また、「元祖女みこし」の参加者に注目すれば、神輿そのものを初めて担ぐ参加者がいる一方で、神輿同好会のメンバーや神輿同好会に所属しなくとも他の祭りに参加している人たちが少なからず確認できた。象徴的なのは、「元祖女みこし」の担ぎ手募集を担当する一人の女性が高円寺の阿波おどりに参加していることである。他の祭りに参加しつつ「元祖女みこし」に参加する人たちもいることが一つの特徴である。

高円寺の阿波おどりは、マスコミへの積極的進出と他の商店街・地域への連単位の参加・指導といった「外部出演」を行っている⁽²⁴⁾。また、高知のよさこい祭りでは、昭和四七年と同四八年にニースのカーニバルに参加した。それを契機に、若年層の参加が拡大したとされる⁽²⁵⁾。ねぶた祭りとよさこい祭りは、遠征のみならず、模倣や移植が行われていることが明らかにされている⁽²⁶⁾。

(四) 共通点と相違点

以上のように、神田祭の「元祖女みこし」と、高円寺の阿波おどりやよさこい祭りなどの「合衆型」の都市祝祭について比較を行ってきたが、まずは共通点について整理してみたい。

【共通点】

①女性の参加者が多いこと。

- ② 一般募集で参加者が集められること。
- ③ 演者と観客の分離といった「パレード」という側面を持つこと。
- ④ 見せ場を持つこと。
- ⑤ 揃いの衣裳を持つこと。
- ⑥ テレビやインターネットなど情報メディアの影響が窺われること。
- ⑦ 神社や神事など伝統的な宗教と何らかのつながりを持つこと。
- ⑧ 他の祭りやイベントなどに「遠征」を行うこと。

なお、③に関しては、「元祖女みこし」では、宮入時や神田神社近くの渡御を除く、連合渡御がパレードに当たると考えられる。

次に、相違点について整理してみたい。

【相違点】

- ① 高円寺の阿波おどりやよさこい祭りは、連やチームの踊りが中心となるため、祭りの前の練習が必要となるが、「元祖女みこし」は、ほとんど練習をしなくても参加できること。
- ② 連やチームでは、練習からパレードまで、比較的長い時間、拘束されるが、「元祖女みこし」は、わずか一日で神田神社への宮入を体験でき、終わるとすぐに解散するなど、拘束される時間が比較的小さいこと。

③「元祖女みこし」は、演者と観客の分離といった「パレード」では終わらず、神田神社への宮入では、演者と観客が入り乱れ、観客は演者に巻き込まれ、神輿の後をぞろぞろと付いて歩くという特徴があること。

④「元祖女みこし」は、町会の半纏を着るため、参加する神輿同好会や団体、個人の名前は表に出にくいため、匿名性が高いが、高円寺の阿波おどりやよさこい祭りは、踊りに参加する連やチームの名称が表に出やすく、技芸を競う側面を持つことから個人の活躍にも観客のまなざしが向けられ、個別具体性が高いこと。

つまり、高円寺の阿波おどりやよさこい祭りに比べ、「元祖女みこし」の方が、練習の必要性が希薄で、拘束時間も少なく、初参加でも短時間で宮入というクライマックスを体験でき、匿名性が高いということが指摘できる。

おわりに

本稿では、神田祭における須田町中部町会の「元祖女みこし」の参加者に注目し、実態調査をもとに、「伝統型」の都市祝祭の中の「合衆型」の都市祝祭について検討してきた。「元祖女みこし」と、高円寺の阿波おどりやよさこい祭りといった「合衆型」の都市祝祭を比較すると、氏索性が問われない点、参加者が一般募集され、流動性が高い点、神社と関わりを持つ点などが共通点としてみえてきた。その一方で、「合衆型」に比べ、「伝統型」に位置付けられる神田祭の「元祖女みこし」の方が、練習の必要性が希薄で、拘束時間も短く、初参加でも短時間で宮入を体験でき、匿名性が高いという特徴を持っている。一般に、伝統的な祭礼の方が、練習も必要であり、準備を含め拘束時間も長く、参加者も限定されているというイメージがあるのではなからうか。しかしながら、実態としては、「元祖女みこし」にみる「伝統型」と、「合衆型」では、逆転現象が起きているのである。

では、「元祖女みこし」は「伝統型」の中に「合衆型」の要素を併せ持った特殊な事例に過ぎないのだろうか。確かに、同じ神田祭の中では、先述したように一般募集をしている町会は少ない。しかしながら、町内の企業を町会の神田祭に呼び込むため、スーツ姿のまま半纏を羽織って神輿の町内渡御に参加できる事例がいくつかの町会でみられる。町内の「○○会社」の会社員という肩書は背負っているものの町外に住む不特定多数の個人であり、練習も必要なく拘束時間も金曜日夜の一〜二時間と短く、初参加も可能である。また、町会員の友だちの友だちのつながりで参加する不特定多数の個人が存在していることも確かである。彼ら彼女らもほとんど神輿担ぎの練習をすることなく短時間でしかも初参加でも参加できる条件が存在している。つまり、他の町会の神田祭においても、実態としては「伝統型」の中に「合衆型」の要素を併せ持っているのである。ただし、町内の企業や町会員の友人・知人であることといった制限は存在している。その制限を取り払ったのが、一般募集を行う「元祖女みこし」である。ただし、男性の参加制限は存在している。

男性の参加制限もなく、担ぎ手をインターネット (Facebook) を通じて一般募集を行っている町会が同じ東京の渋谷にある。『共存学3』の拙稿²⁷⁾で扱った金王八幡宮の祭礼における道玄坂町会の神輿である。ただし、完全に一般募集というわけではなく、団体としての募集を止めたため、実態としては個人申し込みの体裁を取る町会員の友だちの友だちのネットワークを通じて参加する団体も少なくない。しかしながら、「元祖女みこし」と同様に、二人以上のグループではなく、一人で参加する個人も一定数存在しているのである。Facebookを通じて参加してくる人たちもここに含まれる。こうした構造を持つ「元祖女みこし」と道玄坂町会の神輿の参加者数は増加している。しかも両者とも神社祭礼であり、氏子町会の神輿である。

ただし、以上に挙げた要因だけで参加者が増加しているわけではない。もう一つ重要なのは、両者とも参加者が

満足できるような魅力や見せ場を持っていることである。「元祖女みこし」は、伝統ある神田祭で神輿を担げるといふ魅力と神田神社への宮入という見せ場を持ち、道玄坂町会の神輿は、SHIBUYA109前やスクランブル交差点など、多くの人たちが集まる渋谷の著名な場所を神輿を担いで巡幸できるという魅力を持っている。特に、道玄坂町会の神輿の場合、JR渋谷駅ハチ公口の駅前交番まで神輿を渡御させ、そこで交番に「突っ込め、突っ込め」といったパフォーマンスを行える見せ場を持っている。

こうした神田神社やSHIBUYA109、スクランブル交差点などの人の集まる魅力ある場としてのイメージはメディアを通じて再生産されている。特に、神田神社の場合、冒頭に紹介したように、神田祭をはじめメディアに取り上げられる機会が多い。メディアを通じて、歴史ある神田神社と神田祭というブランドイメージが再生産されているのはなからうか。そこには、メディアの側のみならず、神田神社とその神職の対応も影響していると考えられる。参加者が増加する一要因として、メディアの影響が考えられるのである。メディアと神田神社及び神田祭の関係の分析は、今後の大きな課題である。

このように、神田祭の「元祖女みこし」は、「伝統型」の都市祝祭の中に一般募集という不特定多数の個人が参加できる「合衆型」の都市祝祭の要素を併せ持つことによって参加者は増加している。それは、メディアが醸成する神田神社の神田祭というブランドイメージを背景に、女性であれば初参加でも手軽に神田神社の宮入を体験できる魅力を持っているからであると考ええる。「伝統型」都市祝祭の中の「合衆型」の存在、「合衆型」都市祝祭と神社の共存は、人口減少社会の地域社会と神社の今後を占う上でも一つの判断の基準になるのではなからうか。

註

- (1) 阿南透「歴史を再現する」祭礼」『慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要』第二六号、慶応義塾大学大学院社会学研究科、昭和六一年、二三頁。
- (2) 藪田稔「大都市の祭り」『國學院大學日本文化研究所報』五一四（通卷二八号）、國學院大學日本文化研究所、昭和四三年、五頁。
- (3) 藪田稔「祭と都市社会―天下祭」（神田祭・山王祭）調査報告（二）『國學院大學日本文化研究所紀要』第二三輯、國學院大學日本文化研究所、昭和四四年。
- (4) 松平誠「都市祝祭伝統の持続と変容―神田祭による試論」『応用社会学研究』第三五号、立教大学社会学部研究室、平成五年、五七頁。
- (5) 松平誠「現代神田祭仄聞」『国立歴史民俗博物館研究報告』第三三集、国立歴史民俗博物館、平成三年。
- (6) 秋野淳一「元祖女みこし」の変遷にみる地域社会の変容と神田祭」『國學院大學大学院紀要―文学研究科―』第四五輯、國學院大學大学院、平成二六年。
- (7) 松平誠「都市祝祭の社会学」有斐閣、平成二年、三―四頁。
- (8) 前掲松平「都市祝祭の社会学」、一六頁。
- (9) 秋野淳一「渋谷・道玄坂の祭礼からみえる「共存」への課題」古沢広祐責任編集「共存学3…復興・地域の創生、リスク世界のゆくえ」弘文堂、平成二七年。
- (10) 町会手伝い婦人部三人、男性二人（院長とその息子さん）を除いた数。
- (11) ただし、町会青年部I氏の関係が平成二五年は六人であったがその詳細は不明である。そのため、平成二七年は、町会青年部I氏の関係は五人であったが、平成二五年と平成二七年の両方に参加した人は〇人として、合計六〇人（三二・六%）で算出した。仮に六人全員だとすると合計六六人で三五・九%となる。どちらにしても約三割を占めるということができる。
- (12) 前掲松平「都市祝祭伝統の持続と変容―神田祭による試論」。
- (13) 秋野淳一「都市祭りの経年的変化―戦後の地域社会の変容と神田祭五〇年の盛衰―」『國學院雑誌』第一一六卷第一一号、國

- 學院大學、平成二七年。
- (14) 平成二五年の神田祭を対象とした筆者の調査に基づく。
- (15) 松平誠「現代都市祝祭の構成―高円寺阿波おどり―」『季刊人類学』第一九卷第二号、京都大学人類学研究会、昭和六三年、二二九頁。のちに、前掲松平「都市祝祭の社会学」へ収録。
- (16) 前掲松平「現代都市祝祭の構成―高円寺阿波おどり―」、二二二頁。
- (17) 内田忠賢「都市と祭り―高知「よさこい祭り」へのアプローチ(1)―」『高知大学教育学部研究報告』第二部第四号、高知大学教育学部、平成五年。
- (18) 内田忠賢「地域イベントの社会と空間―高知「よさこい祭り」へのアプローチ(2)―」『高知大学教育学部研究報告』第二部第四号、高知大学教育学部、平成六年。
- (19) 矢島妙子「「よさこい祭り」の地域的展開―その予備的考察―」『常民文化』第三号、成城大学常民文化研究会、平成二二年、三一頁。
- (20) 前掲矢島「「よさこい祭り」の地域的展開―その予備的考察―」、三七―三八頁。
- (21) 宇野正人「都市祭における伝統への指向―神戸まつり―」『日本民俗学』第二二八号、日本民俗学会、昭和五五年。
- (22) 阿南透「祭りの海外遠征―ロサンゼルス青森ねぶた―」『情報と社会』第一八号、江戸川大学、平成二〇年、二二頁。
- (23) 前掲秋野「「元祖女みこし」の変遷にみる地域社会の変容と神田祭」。
- (24) 前掲松平「現代都市祝祭の構成―高円寺阿波おどり―」、二二八頁。
- (25) 前掲内田「地域イベントの社会と空間―高知「よさこい祭り」へのアプローチ(2)―」、四頁。
- (26) 阿南透・内田忠賢・才津祐美子・矢島妙子「祭りの「旅」―ねぶた」と「よさこい」の遠征・模倣・移植―」内田忠賢編『よさこい/YOSAKOI学リディングス』、開成出版、平成一五年。
- (27) 前掲秋野「渋谷・道玄坂の祭礼からみえる「共存」への課題」。

付記

本稿は、平成二五年十二月八日に、國學院大學で開催された神道宗教学会第六七回学術大会で研究発表をした「元祖女みこし」の現状にみる参加者の実態と神田祭の変化」をベースに、平成二七年の神田祭調査データを踏まえ、大幅に加筆・修正したものである。なお、本稿は國學院大學二世紀研究教育計画委員会研究事業「地域・渋谷から発信する共存社会の構築」（研究代表・阪本是丸教授）の研究成果の一部である。また、平成二四年度～平成二六年度の國學院大學大学院特定課題研究「地域社会の変容と都市祭り―神田祭を事例として」（研究代表・石井研士教授）の研究成果の一部である。

謝辞

本稿の執筆に当り、神田神社、須田町中部町会、「元祖女みこし」の参加者の皆様にお世話になりました。文末ながら感謝申し上げます。